

石狩の除虫菊栽培 じゆ ちゆう きく 見本

抜き取らないでください

除虫菊はキク科の多年草でムシヨケギクとも呼ばれ、開花した花を摘み取り乾燥して、蚊取り線香、蚤取粉、農薬などの原料とします。

石狩の除虫菊栽培は、明治25（1892）年（明治29年ともいわれる）に、花畔村の金子清一郎が、和歌山の上山英一郎（金鳥の創業者）から種子を取り寄せて、50株を道内他産地に先駆けて作付けしたのが始まりです。



除虫菊の花

金子は製粉した蚤取粉も販売し、他の農家にも現金収入になる除虫菊をすすめたので、花畔だけでなく親船町などにも栽培が広がり、明治36（1903）年には全町の栽培面積が1町2反に達しました。除虫菊は、もともと乾燥した気候と排水の良い砂質の瘦地を好むため、石狩に適していたのです。大正6（1917）年には、二代目金子清一郎を組合長として「石狩町除虫菊栽培組合」が設立されました。

道内の他の地域でも除虫菊栽培熱は高まり、特に第一次世界大戦（1914～1918年）後、ヨーロッパで生産が激減して除虫菊の相場が上昇したのにもない、北海道の除虫菊栽培は急激に増加し、大正14（1925）年には国内作付面積の69%を占める、全国一の産地となりました。その後、金子は昭和7（1932）年に、和寒村や倶知安町の農家とともに北海道除虫菊製品工業組合を設立して、濃厚エキスを「ピレトシックス」、農業用乳剤および家庭用スプレーを「ハルク」の名称で商品化し、道内外や海外へも販売しましたが、昭和14（1939）年に北聯（ホクレン）に買収されています。また、昭和17（1942）年には戦時体制の中、石狩町除虫菊栽培組合は石狩町産業組合に統合されました。

第二次大戦後は、アメリカからDDTやBHCなどの安価な化学農薬が輸入され、除虫菊の殺虫剤は市場での競争力をなくしていきました。昭和25（1950）年頃には花畔の一部で作付けされるだけとなり、昭和35（1960）年頃を最後にまったく作られなくなりました。

（石井滋朗）

石狩町の除虫菊生産量と販売額

年度	大正6年	大正9年	大正13年	大正15年	昭和5年	昭和9年	昭和13年	昭和15年
生産量（貫）	910	662	1,322	4,202	2,942	1,381	1,419	1,137
販売額（円）	2,311	6,384	7,273	5,133	5,805	7,095	6,750	7,187

（金子（1988）より）

- （1）金子仲久（1988）除虫菊について、いしかり暦7号、石狩町郷土研究会。
- （2）石狩町（1991）石狩町誌／中1、石狩町。
- （3）鈴木トミエ（1996）石狩百話、石狩市。
- （4）北海道除虫菊調査会（1930）北海道の除虫菊。